

## 日本英語教育史学会 会報

278

2016 年 12 月 15 日

**HiSELT** Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番  
東京電機大学工学部英語系列 河村和也研究室  
tel: 03-5284-5641 fax: 03-5284-5699  
e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第260回研究例会報告

2016 (平成 28) 年 11 月 26 日 (土), 東京電機大学東京千住キャンパス (東京都足立区) において第 260 回研究例会が開催されました。参加者は 33 名でした。

はじめに研究発表が行われ, 青田庄真氏 (東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC) が「英語教育史研究におけるテキストマイニング: 研究事例の紹介と今後の展望」というテーマでお話しされました。続いて「自著を語る」の特別編として河村和也氏 (東京電機大学), 若有保彦氏 (秋田大学) による「若林俊輔の英語教育論を再考する: 『英語は「教わったように教えるな』を素材に」の発表が行われました。司会は馬本勉氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は青田氏, ②は河村氏及び若有氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①新しい研究方法を紹介していただき, 関心を覚えました。戦前のものを対象にテキストマイニングを行うとどうなるのだろうかと思いました。お話しの中にあつた, 文部省が文部科学省と改称してから「科学」という語が急増したということなどは, なるほどそうだろうなと思いつながりがいりましたが, ある概念を表す用語が一定でない場合はどうなるのだろうかと考えました。例えば, 音声学の「音節」は McKerrow・片山寛などでは「熟音」としてありますので, 「音節」だけでテキストマイニングを行うとこれは落とされてしまうでしょうから, そういう場合はどうなるのだろうかということです。なお, 研究発表というカテゴリーですので, この方法を用いて自らが行った研究の成果を発表されないと, これでは英語教育史入門セミナーとどう異なるのだろうかと思いました。(Dragon)

◆①テキストマイニングは今後には様々な可能性を秘めている方法だと思いました。ぜひ若い人を中心に共同研究を組織され, 分析対象を拡張していくことで, 新たな知見を明らかにして下さい。ただし, 日本の (外国語) 教育政策は国会はもとより, 公式の審議会においても「決定」されませんので, 本当の (裏での) 決定過程を明らかにできない点が残念です。

(みかん舟)

◆①発表を聞く中で本当に大変な作業を伴う研究であると感じました。アナログ人間の小学生は分析以前に立往生し研究どころではないかとも思いつながりながら聞かせて頂きました。しかし若い研究者のこうした努力により大きな研究もまた可能なのだと思いました。これからの更なる研究を期待し, またご発表を頂けるものと信じております。青田氏の努力の成果またその蓄積を感じる発表でした。(zuoteng)

<発表を終えて>

青田 庄真 (東京大学大学院教育学研究科・  
日本学術振興会特別研究員DC)

私が修士論文の執筆にあたって身に付けたノウハウの紹介を中心に発表させて頂きました。最終的には研究発表という位置付けを採らせて頂きましたが、当初はセミナーという選択肢もご提示頂いていたため、発表にあたっては、少しでも学部生や修士の方の参考になるように、具体例を交えてお伝えすることを心がけました。

私は、これまで主として国会会議録や学術雑誌掲載論文を用い、英語教育の政策過程や関係する言説等を分析してきました。私のそうした研究は、従来の歴史的な「英語教育史研究」にはあまり受け入れられてこなかったように思います。しかしながら、今回発表の機会を賜り、私が学んで来た方法論を英語教育史研究の発展に寄与させるための展望について皆様と議論することができました。私の研究はまだ未熟ですが、本発表で提示させて頂いたようなテーマ案やデータベースの利用案等が今回ご参加下さった方々の手によってますます発展させられ、英語教育史研究の高度化に少しでも貢献できると幸いです。

末筆ながら、貴重な発表の機会を設けて下さりました先生方、拙い発表を温かく見守って下さった方々や沢山の貴重なご質問・ご指摘に深く感謝申し上げます。



◆①テキストマイニングについて知らない点が多かったため、非常に興味深かったです。何かに着目する際のきっかけとできればいいという点は、他の研究方法でも参考にしたい考えだと感じました。(A.N.)

◆①英語教育の研究法の様々なお話でした。データも膨大で研究切り口によりどのデータを使うかを慎重に考える必要があると思いました。(Take)

◆①分析をする際にコンピュータに指定した用語を拾わせ、そこから様々な背景を読み取っていくきっかけに使うというのは今だからこその研究だなと思いました。ただ、お話の中でも述べられていたように、コンピュータは100%正しいわけではないと思うので、それを認識した上で活用していかなければならないのかなと思います。何にせよ、これから新たな発見・研究をしていく上で有効なツールであると思います。これからこういった種の研究も進んでいくのではないかと思います。

(Blue Sky)

◆①アナログ的に一つ一つ調べることももちろんですが、デジタル的な技術を使うことも、膨大な量の資料を読み込み考察することが重要であり、大変な作業であることが分かりました。(Akim)

◆②若林俊輔先生は、厳しくも強い精神で英語政策や英語教師への姿勢を貫き、様々なところで衝突をしていた方とっておりました。今回の発表でその反骨精神の反面に優しさや人間味ある先生だと更に感じる良い発表でした。また若林先生のこれまでの詳細な記録をもとに、更に晩年の先生のご様子などを生き活きと解説された河村先生お二人のお話に夢中になりました。

以前、この学会の全国大会で若林先生と同じ宿に宿泊した際、若林先生が自前のフルートを奏でている情景を思い出し、又お話しし感情豊かな、そして人間味のある先生だと思ったことがある記憶がお二人のお話から重なりました。また皆様からのお話も楽しく聞くことが出来ました。(zuoteng)

## &lt; 発表を終えて &gt;

河村 和也 (東京電機大学)



このたびは「自著を語る」のシリーズに「特別編」と付して貴重な機会を与えていただきましたことを心より感謝申し上げます。例会では、みなさまにとってそれぞれの「若林俊輔像」があることをひしひしと感じました。そして、先生とその言説を英語教育史の枠組みの中で論ずることの難しさを改めて感じた次第です。

会報ですので、これにまつわるエピソードをひとつ紹介し、私の責めを塞ぎたく思います。

先生は自宅に教え子を集め、COFS という月に一度の読書会を主宰されていまして。参加者は当日の感想を書いて提出することになっており、半月もすると、それらがまとめられニューズレターとして送られてきました。この形式は私たち日本英語教育史学会の月報（現在の会報）をヒントにされたのだとかがあったことがあります。ただ、先生はペンネームで感想を書くことを認めませんでした。「匿名はだめだ。英語教育史学会の月報はすばらしいが、あれだけはいけない」とおっしゃったことが忘れられません。

先生は英語教育における教師の「責任」ということを常に念頭に置かれていましたが、こんなところにも先生のぶれない思いがあらわれていたのだと思います。

◆②今回、もう亡くなられてしまいましたが、若林俊輔先生という日本の英語教育にご尽力された先生について知ることができました。参加されていた先生方で若林先生と関わりがあった方々のお話で、どういった活躍をされていたのか、また人柄の良さなどを短い時間の中でしたが、感じることができました。

個人的にですが、群馬県の高等学校を卒業され、群馬工業高等専門学校で専任講師をなされていたとのことで親近感が湧きました。お土産としていただいた雑誌の記事などを家に帰ってからじっくり読んでみて、先生が中学、高校時代の経験があり、疑問に思うことを解決して学んだ積み重ねがあるからこそ、英語の教師として生徒のために、疑問にも熱心に対応しておられることがわかりました。また「責任を生徒におしつけない」という言葉が印象に残っていますが、繋がる部分があるのではないかと思います。こういったことはネイティブや海外で過ごして自然に身につけたということではないからこそ、考えられることで、英語を生徒に教えるということは、日本人ならではの疑問を

持ち、答えられることが大切だと感じました。

今まで勉強していて疑問に思ったことはたくさんありますが、こういうものだと考えていた部分は沢山あります。もう一度なぜそうなるのかと立ち止まって調べてみるのが大事だと今日教わった気がします。 (lua)

◆②故若林先生が書かれたものが 700 本ばかりになるということで、今回この編集に当たられた先生方はそれを全て読まれたのだろうと敬服いたしました。むかし、先生の『英語の文字』を入手して読んだ時に、小文字が大文字から派生したその道筋が分かりやすく書かれていて、以来、中学や高校の先生から生徒が b と d の区別ができないというような話を聞くと、それぞれ B, D からどのように変化したかを示して、そういうふうには認知的に理解させれば覚えられるでしょうと説明し、喜ばれたことが一再ならずあります。個人的には親しくお話する機会はほとんどありませんでしたが、若林先生のお書きになったものからは多くのことを教えられました。そんなことを思いながら本日のご発表をうかがいました。 (Dragon)

## &lt; 発表を終えて &gt;

若手 保彦 (秋田大学)

今回の発表では、本書で盛り込めなかった若林先生の個人的な側面の紹介と、先生の英語教育論に関してフロアから意見をいただくことの2つを目的に臨みました。私の拙い話で若林先生のことをどれだけ伝えられたかあまり自信はありませんが、「お土産」の資料と合わせて、一般にはとても激しく厳しいイメージのある先生に、教え子への深い愛情を注ぐ一面もあったことも感じていただければ幸いです。

後半の「若林俊輔の英語教育論」については、先生をよくご存じの先生方からいろいろ貴重な情報をいただけたのは大変有り難いことでした。一方で、本書の主な対象と位置づけていた若い先生方や学生にも、先生の学習者論や教材論などに対する意見を伺っておけばよかったという心残りもあります。

今後は、若林先生の記事リストの完成度を高めることと、先生の主張されていた「ことばの教育」の視点を現在の英語授業の中でどのように取り入れたらよいかについて考えていきたいと思えます。



◆②配布された資料、そして河村先生、若手先生のお話から若林先生は英語教育に対して真摯に取り組んだ方であったということを知りました。昔から日本の英語教育を改善しようとしていたことがお聞きした先生のエピソードからもひしひしと伝わってきました。現在 2020 年のオリンピックに向けて英語教育にもよく焦点が当てられています。若林先生のような先人が積み上げてきたものを糧としつつ発展していけばいいと思います。また、自分も残された学生生活において英語学習を充実させ、能力を高めていきたいと思いました。(Blue Sky)

◆②若林先生のことをご存知でいらっしゃる多くの先生方からもお話を聴けて良かったです。今日の体験をもとに、より深くこの本を読もうと思います。(A.N.)

◆②若林先生の教育論を振り返る貴重な機会でした。「人のせいにはしない」とのことで、宿題・予習をしないと嘆く前にやり方を教えたのかと反省材料に事欠かない議論でした。(Take)

◆②中学・高校時代に受けた英語の授業を振り返りながら、発表を拝聴しました。そのな

かで、強く心に残ったことが3つあります。1つ目は、教科書などにおける、会話教材への批判に関するお話です。ある行動があつてはじめて、感情のこもったことばで表現できるというお話に大変共感いたしました。これまで、英会話のフレーズや文法は教科書を使い、先生から教えてもらうままに学んできましたが、英語教育の観点から見て、それは否定的な意見があることを知りました。2つ目は、語学には、体育の授業のための体育館のような部屋がないというお話です。現実的な視点からは、ずれてしまっていますが、語学も体育のように、心や身体を使って身につけられる教室があれば、教科書だけでは学ぶことのできない英語を習得できると感じました。3つ目は、地域の独自性を尊重した教科書についてのお話です。こうした点を工夫することで、より多くの生徒が楽しく学習に取り組めるのではないかと思います。(Cayu)

◆②実に面白い企画でした。あえて申せば、本学会の例会としては、若林先生の英語教育史論についてもっとうかがいたいと思えました。そんな研究発表が続くとよいのですが。

(みかん舟)

## 》) 事務局より

会員のみなさまには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方へのご案内は郵便もしくは電子メールで順次お届けいたしておりますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。なお、ご不明の点は、お手数ですが事務局(会計担当)までお問い合わせさせていただきますようお願いいたします。

問い合わせ先 事務局 (会計担当) 河村和也  
電子メール : membership@hiset.jp 携帯電話 : 090-3437-1703

## 》) 英語教育史フォルダ

- ◆ 中村 捷『名著に学ぶこれからの英語教育と教授法』開拓社、本体 2,900 円  
\*昨年 6 月に齊藤秀三郎の『実用英文典』を訳述されたのに続くお仕事です。

## 第 261 回 研究例会のご案内

日 時 : 2017 年 1 月 7 日 (土) 14:00~17:00 (今回は第 1 土曜日の開催となります。)  
場 所 : 東京電機大学 (東京都足立区千住旭町 5 番)  
東京千住キャンパス 1 号館 2 階 10225 (1225 セミナー室)

研究発表 「発音学者としての岡倉由三郎」

上野 舞斗 (和歌山大学大学院)

【概要】 日本英語教育史上の最も著名な人物の一人である岡倉由三郎に関する先行研究は膨大にある。しかし、そのほとんどは言語学者、日本語学者、英語教育者、英文学者としての岡倉を描いたものであり、発音学者としての岡倉を描いた研究は極めて少ない。そこで、本発表では、『英語発音学大綱』などの著作からはもちろん、岡倉が著した知られざる資料から、発音学者としての岡倉由三郎について考察を行う。

自著を語る 「武信の出会った人々：森悟著『武信由太郎伝』を素材に」

提案者：森 悟 (鳥取県立米子南高等学校)

指定討論者：惟任 泰裕 (神戸大学大学院)

【概要】 武信由太郎 (たけのぶよしたろう) は明治・大正・昭和を生きた英学者である。鳥取県で生まれ、東京でその生を終えた。英語とともに生き、そして日本の英学界に多大な貢献をした。しかし武信は不器用であった。訥弁であった。何を言っているのか理解できないのが普通であった。だから人生の大半を英文の添削に費やした。それが武信の生き方であった。

今回は、そんな武信の人生に影響を与えた人々について述べてみたいと思っている。

参加費 : 無料

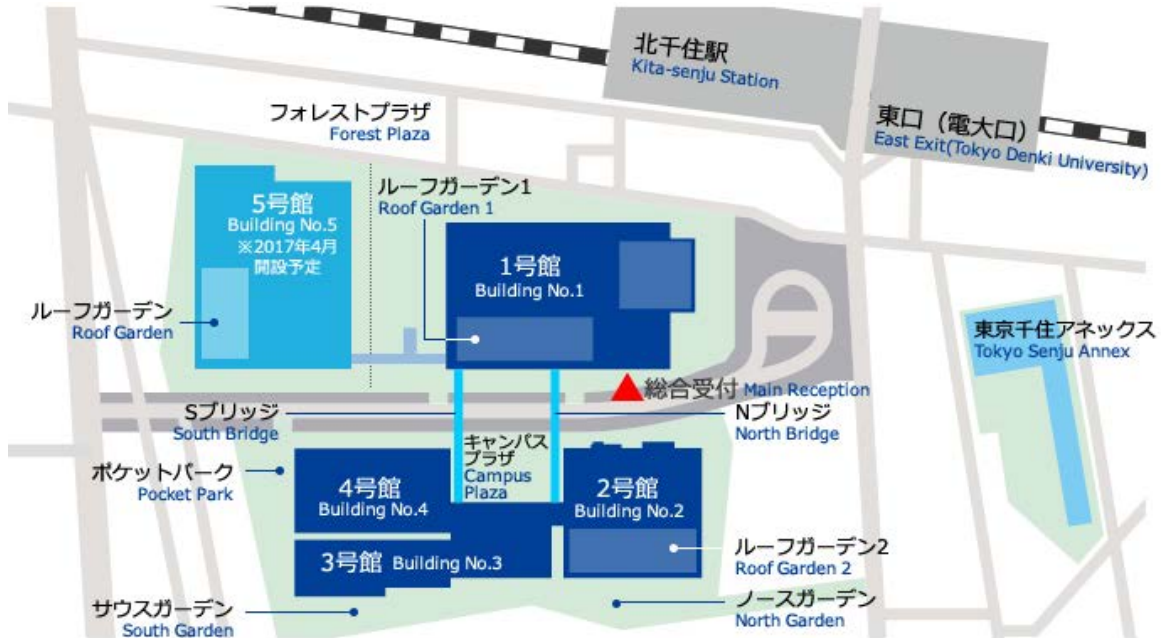
問合先 : 日本英語教育史学会 例会担当 (reikai@hiset.jp)

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。



【会場案内】 (東京電機大学 website より)



【交通案内】

JR 常磐線 東武スカイツリーライン 地下鉄日比谷線 地下鉄千代田線  
「北千住駅」東口 (電大) 下車徒歩 1 分

## )) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 262 回研究例会 2017 年 3 月 18 日 (土) 大阪府大阪市で開催予定
  - ◆ 第 33 回全国大会 2017 年 5 月 20・21 日 (土・日) 福島県郡山市で開催予定
  - ◆ 第 263 回研究例会 2017 年 7 月 15 日 (土) 東京都足立区で開催予定
  - ◆ 第 264 回研究例会 2017 年 9 月 16 日 (土) 広島県広島市で開催予定
  - ◆ 第 265 回研究例会 2017 年 11 月 18 日 (土) 東京都足立区で開催予定
- 日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の前々月 10 日 (5 月発表希望であれば 3 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: [reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp)

**EDITOR'S BOX** 恥ずかしながら先日初めて北千住にある東京電機大学の東京千住キャンパスを訪れました。大学というより会社のオフィスを思わせる外観や、学食などいくつかの施設を除きカードがないとゲートを通れないセキュリティの状況にびっくりしました。研究室のある建物の 2 階の廊下を深夜に猫が歩いていた、キャンパス内にカモシカが出現する私の勤務先とは大きな差があるなあ、と感じました。なお勤務先では「キャンパスにいるカモシカを目撃すると留年する」という「都市伝説」があるようです。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 [geppo@hiset.jp](mailto:geppo@hiset.jp))